

Title	アジア太平洋論叢 第24号 編集後記
Author(s)	
Citation	アジア太平洋論叢. 2022, 24, p. 313-314
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/95097">https://hdl.handle.net/11094/95097</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 編集後記

『アジア太平洋論叢』第24号をお届けします。今号には、大阪大学人間科学研究科の三好恵真子先生を中心に展開されている、中国の環境問題に関する共同研究の成果をまとめて掲載することができました。こうした特集号を恒常的に出せるように、皆様がふだんから行われている共同研究やシンポジウムについて、積極的に情報をお寄せ下さい。せっかく時間をかけて企画し実施された成果を、大阪から世界に発信していく媒体として、本誌がお役にたてれば幸いです。

また、本号には、留学生も含めた、若い世代の大学院生、研究者による論考や研究ノートを数多く掲載することができました。e-journal化してから、海外も含めて、読者層も大幅に広がっています。皆さんの自信作を、是非とも積極的にお寄せ下さい。

(秋田 茂)

ミャンマーでのクーデターから1年が経ち、教育への打撃がしずかにふかく広まっている。

われわれにとってそれは、外国語学部ビルマ語専攻の学生たちが留学とインターンの機会を奪われたということである。コロナ感染が世界的な流行となった2020年3月、ミャンマーに滞在していた学生たちはほうほうのていで帰国してきた。でも、1年後のクーデターで再渡航がほぼ絶望的になるなど、だれが予想できただろうか。10年間の民主化でミャンマー渡航が当たり前になっていたところ、それ以前の、留学も渡航もできない状況にもどりつつある。

でも、なににもましてこれは、ミャンマーの子供たちの未来への打撃である。クーデター直後からの市民的不服従運動(CDM)では、医療従事者とともに教育関係者がその主要な担い手になった。軍の弾圧によって市民たちは沈黙を強いられ、いたしかたなく日常生活に復帰しているかのように見える。しかし、多くの教員が職場から追放され、小中高校も大学も開店休業状態だ。知り合いの大学の先生は教授のポストを失い、娘さんはネットでボランティアの教育を受けているという。ヤンゴン市内の学校に戻っている子供はほんといないともいう。軍は弾圧に忙しく、教育にまったく頓着していないようだ。40万と言われる将兵にも家庭があり子供がいるだろう。(池田一人)

24号が予定通り刊行出来たことをまず喜びたい。編集長の宮原暁先生のご尽力に深謝したい。今号は、これまでになく多くの論文、研究ノートが掲載されるとともに、三好恵真子先生を中心としたメンバーによる特集が組まれるなど、多くの成果が出された。嬉しいかぎりである。

査読に当たられた先生方には貴重な時間を割いていただいたことに感謝したい。残念ながら今回、修正稿の提出期限に間に合わないなどの理由から掲載されなかった論考もある。再考の上、次号への投稿を期待している。

また、大阪大学地域研究フォーラム(OUFAS)においては、例年通り、多くの報告がなされた。さらに多くの学内外の研究者がOUFASに参加されることを願っている。

ともあれ、本誌のますますの発展のために、次号にも多くの論考が投稿されることを期待している。(高山正樹)

アジア太平洋論叢が復刊してから3号になる。電子ジャーナルといいながら、なんとか紙でも出せている。秋田茂先生や三好恵真子先生の資金的なご支援あつてのことではあるが、同時に「紙で出したい」という投稿者の熱い思いに背中を押されて、というの大きい。それこそ死力を尽くして新たな知を生み出し、それを記録し残そうとしている投稿者の皆さんの熱意の賜物なのである。

考えてみれば、古来、東アジアでは、文字は、水から作られた紙に、火、すなわち墨を用いて書かれてきた。火と水の相克と結合によって生み出された文字は、簡単に抹消することはできないが、重大な記録の変更をしなければならないときには、書かれた文字を水に流して抹消するといったようなことを韓流時代劇で観た覚えがある。紙に書いたものはすべからず尊ぶべきであり、手紙や新聞や書類をどうしても処分しなければならないときには、寺へ持って行って燃やし、その尊い灰をサンフランシスコ湾の知られざる場所へ捨てる、というのは、フェイ・ミエン・インの小説『骨』にあるエピソードだ。

このような文字にまつわる火と水の結びつきは、なんとも神秘的である。毎年1月14日に行われる五條陀々堂の鬼はしりでは、人びとに幸をもたらす鬼が燃え盛る大松明で「水」という文字を書く。そうした重大さ、神秘さを感じつつ、編集の実務を担当する者として常に自問するのは、編集者の理解が至らぬため、「研究」が、本来持っていたおおらかさを失いつつあるため、投稿者が新しい知を生み出そうとする妨げになっていないかということである。今号には、「もう少し練り直して欲しい」と注文をつけた投稿がいくつかあった。24号には、新たにエッセイ・クリティーク・コメンタリーというカタカナだらけのセクションを創った。短い論評、批評、解説やコメントなどを掲載するセクションである。もし本誌がおおらかさを失ったと感じられる際には、そのセクションでやんわりとご批判いただけたらと思う。(宮原暁)

本号は、大阪大学大学院人間科学研究科三好恵真子先生の研究費によって刊行が可能となりました。改めて御礼申し上げます。

またお忙しいなか、本号の論説、研究ノートの査読の労をお取りいただいた13名の査読者の方に、未筆ながら御礼申し上げます。ありがとうございました。